

N I C UにおけるChronic Intensive Care を要する新生児例

— 埼玉県に於ける調査成績 —

小 川 雄 之 亮

川 瀬 淳

(埼玉医科大学総合医療センター小児科)

研究目的

N I C Uにおける治療効果の向上と相俟って、従来に比して長期にわたって集中治療を必要とする新生児が増えつつある。この事はN I C Uに於ける病床の回転率を低下させるものであり、相対的にN I C Uの病床の不足を来す可能性を示すものである。

そこで、昭和62年度の本研究班の共通の調査研究として各地域に於ける chronic intensive care例の実態調査を行うこととなった。本研究はその一環として埼玉県に於ける実態を調査せんとするものである。

研究方法

埼玉県のN I C Uを有する施設、すなわち埼玉県周産期医療懇話会のメンバーである25病院を対象にアンケート調査を行なった。

調査の内容は各施設における昭和61年1年間の体重群別入院数、死亡退院数、及び3カ月以上連続して入院していた新生児例のリストで、このリストには入院期間は勿論のこと、機械的人工換気の期間、静脈内持続点滴の期間、酸素投与期間、長期入院を要した主な原因、転帰等が含まれる。

研究成績及び考案

回答は25施設中24施設から得られ、回収率は96%であった。これら24施設の新生児入院数は< 1,000g ; 66例 (内死亡35例, 53.0%)、1,000 ~ 1,499g ; 146例 (内死亡18例, 12.3%)、1,500 ~ 1,999g ; 304例 (死亡12例, 3.9%)、2,000 ~ 2,499g ; 567例 (内死亡18例, 3.2%)、≥ 2,500g ; 3,065例 (内死亡35例, 1.1%) であった。これらの中で3カ月以上の長期入院例は表1に示す如く計79例で、これは全入院例の1.9%、そして同年の埼玉県の全出生数の0.12%に相当した。出生体重群別にみると体重の小さな群ほど長期入院の率が高くなり、超未熟児が79例中

表1 出生体重群別NICU長期入院新生児例

出生体重群	埼玉県内出生数	NICU入院数	長期入院数
<1,000g	85	66 (77.6%)	23 (34.8%)
1,000-1,499g	188	146 (77.7%)	25 (17.1%)
1,500-1,999g	495	304 (61.4%)	8 (2.6%)
2,000-2,499g	2,723	567 (20.8%)	9 (1.6%)
>2,500g	50,894	3,065 (6.0%)	14 (0.5%)
計	64,389	4,148 (6.4%)	79 (1.9%)

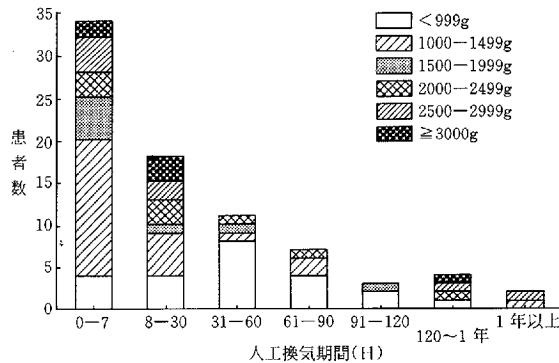


図1 NICU長期入院例の機械的人工換気期間

23例(29.1%)を占めた。また24のNICUでケアを受けた1,000g未満の66例中約1/3が3カ月以上の長期入院例であった。

図1は機械的人工換気を要した期間を体重群別に示したものである。おおよそ4カ月までは1,000g未満の超未熟児の占める割合が大であるがそれ以降はかえって成熟児が多くなった。

図2は体重群別の入院患者数の%を修正在胎週にプロットしたもので、超未熟児や極小未熟児は修正在胎85週でほとんど退院し、さらに長期間の入院を必要とするのは成熟児であることが示されている。

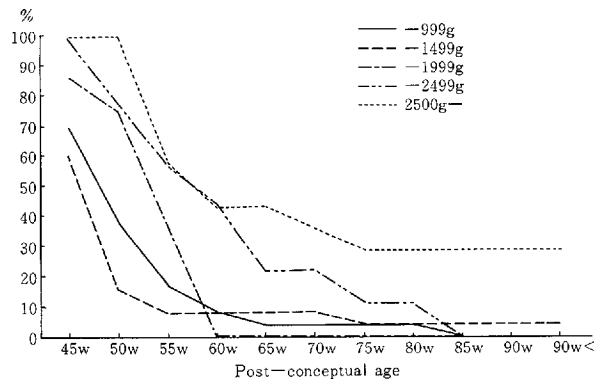


図2 NICU長期入院例の体重群別入院期間の比率

表2 出生体重別NICU長期入院例の転帰

出生体重群	長期入院例	死亡退院例	生存退院例	家庭酸素療法	家庭細管療法
<1,000g	23	1 (4.3%)	22	2 (9.1%)	1 (4.5%)
1,000-1,499g	25	1 (4.0%)	24	0	1 (4.2%)
1,500-1,999g	8	2 (25.0%)	6	0	1 (16.7%)
2,000-2,499g	9	2 (22.2%)	7	0	1 (14.3%)
≤2,500g	14	4 (28.6%)	10	1 (10.0%)	1 (10.0%)
計	79	10 (12.7%)	69	3 (4.3%)	5 (7.2%)

表2は3カ月以上の長期入院例のその後の転帰を示したもので、超未熟児の中には家庭内酸素療法を要したものもあるものの、死亡率は低かった。これに対して成熟児の死亡率は高く予後は不良であった。

長期入院を必要とした理由は出生体重の低い群では低体重やBPDなど未熟性に起因するものが多いが、成熟児にあっては中枢神経系後障害や奇形によるものが多く、予後不良の原因であるとおもわれた。

以上の成績は成熟児の長期入院例は予後不良の例が多く、諸種の問題があるものの、現在増加しつつある超未熟児の場合は予後が良好な場合が多いので、いわゆるchronic intensive careが今後益々必要とされ、従ってchronic intensive careを考慮にいれた新生児の医療のシステム化が望まれることを物語っていると思われる。

昭和61年の埼玉県に於ける出生体重1,500g未満の極小未熟児は計273例で、このうち本調査の対象となったのは212例(77.7%)であるところから、本調査はおおよそ78%をカバーしているものと考えられ、この値から補正を試みると、昭和61年1年間に埼玉県ではおおよそ100例のchronic intensive care例が居たと計算される。埼玉県におけるNICUの適性配置、地域化などの計画には当然考慮すべきデータであろう。

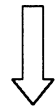
アンケート調査協力施設

深谷赤十字病院、厚生連熊谷総合病院、愛生会病院、厚生連幸手総合病院、仁愛会東埼玉病院、県立小児医療センター、丸山記念病院、春日部市立病院、大宮医師会市民病院、大宮赤十字病院、社保埼玉中央病院、浦和市立病院、済生会川口総合病院、川口市民病院、越谷市立病院、独協医大越谷病院、草加市立病院、小川赤十字病院、埼玉医大病院、西部産婦人科小児科病院、国立西埼玉中央病院、防衛医大病院、国立埼玉病院、埼玉医大総合医療センター



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

NICUにおける治療効果の向上と相俟って、従来に比して長期にわたって集中治療を必要とする新生児が増えつつある。この事はNICUに於ける病床の回転率を低下させるものであり、相対的にNICUの病床の不足を来す可能性を示すものである。

そこで、昭和62年度の本研究班の共通の調査研究として各地域に於けるchronicintensivecare例の実態調査を行うこととなった。本研究はその一環として埼玉県に於ける実態を調査せんとするものである。

研究方法

埼玉県のNICUを有する施設、すなわち埼玉県周産期医療懇話会のメンバーである25病院を対象にアンケート調査を行なった。

調査の内容は各施設における昭和61年1年間の体重群別入院数、死亡退院数、及び3ヵ月以上連続して入院していた新生児例のリストで、このリストには入院期間は勿論のこと、機械的人工換気の期間、静脈内持続点滴の期間、酸素投与期間、長期入院を要した主な原因、転帰等が含まれる。